

令和7年度第2回野洲市総合教育会議 議事録

○日 時 令和7年2月5日

開会時刻 14時00分

閉会時刻 15時45分

○場 所 野洲市役所本館3階 第一委員会室

○出席者

市 長 櫻本 直樹

政策調整部長 井狩 昭彦

政策調整部次長 松井 健作

総合調整課長 岡田 憲人

教育長 北脇 泰久

委 員 瀬古 良勝

委 員 南出 久仁子

委 員 野村 哲

教育部長 田中 明美

教育部政策監（幼稚園教育担当） 北田 一栄

教育部次長 川崎 小百合

教育部次長（学校教育担当） 小寺 岳正

学務課長 荒川 貴之

学務課主席参事 中野 良博

学務課参事 原嶋 亜紀

学務課専門員 中西 裕二

学務課職員（事務局） 枝 瑞紀

滋賀県立大学高専開設準備局長（発表者） 越後 敏夫

【川崎教育部次長】 ただいまより令和7年度第2回野洲市総合教育会議を開催いたします。

私、本日、進行を務めます野洲市教育委員会事務局教育部次長の川崎と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の会議は公開で行います。また、議事録や記録作成のため、録音及び写真撮影をさせていただきますので、あらかじめご了承ください。

なお、本日は山崎委員がご欠席である旨、報告させていただきます。

それでは、お手元にお配りしております会議次第に沿って進めさせていただきます。

まず、開会に当たりまして、市長の櫻本直樹よりご挨拶申し上げます。

【櫻本市長】 皆さん、こんにちは。大変ご多用の中、ご出席いただきまして誠にありがとうございます。また、本市のまちづくり、中でもこの教育行政につきまして格別のご理解、ご協力をいただいておりますこと、この場をお借りいたしましてお礼を申し上げたいと思います。

本日は、二つの議事事項でございまして、まず1点目、「滋賀県立高等専門学校の開設に向けた準備の状況について」ということでございます。市内の子どもたちのみならず、県内皆さんが心待ちにしている高専であります。今日は高専開設準備局から局長の越後様に来ていただきまして、高専の魅力、また設置に向けた今の状況についてお話をいただけるということでございます。なかなか県議会等の関係もございまして、全てをお答えいただけるかどうかというところはありますけれども、話せる範囲でご解説いただけるのではないかと楽しみにしているところであります。

もう1点が「ALTの活用について」ということで、これまで野洲市のほうでは、ALT設置の状況がなかったわけでありまして、今年度から導入を始めました。今後、子どもたちに生の英語を学んでいただける、触れていただける大変良い教育のツールということでございまして、一定評価もいただいているところでございます。この辺の運用の状況、効果につきまして本日はご報告いただきたいと思います。皆さんの様々な忌憚のないご意見をいただき、次へまた進めていきたいと思っておりますので、本日の会議、有意義なものとなりますように、どうぞよろしくお願いいたします。開会に当たりましてのご挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

【川崎教育部次長】 市長、ありがとうございます。

それでは、これからの議事進行は市長が務めます。櫻本市長、よろしくお願いいたします。

【櫻本市長】 それでは、ここからは私が議事を進めさせていただきます。着座にて進めさせていただきます。

早速ですが、議題の1になります。滋賀県立高等専門学校の開設に向けた準備状況についてということで、先ほど申し上げましたが、説明者として滋賀県立大学高専開設準備局・越後局長にお越しいただいておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【越後滋賀県立大学高専開設準備局長】 改めまして、皆さん、こんにちは。私、公立

大学法人滋賀県立大学で高専開設準備局の局長をしております越後でございます。もともと滋賀県職員でございまして、去年の4月から派遣という形で大学法人で高専の開設準備の仕事をしております。30数年公務員をしておりますが、これまで教育委員会へ行ったことがなくて、教育行政が初めてなのにこれをやるということでございまして、まして今日は教育関係の皆さん、プロの前でしゃべるということで、良いのかなと思いつつ準備の状況を説明させていただきたいと思っております。

滋賀県はこれまで高専がありませんでした。私も含めてそうなんですけれども、高専という言葉は聞いているけれども、どんな学校ということをご存じない方が滋賀県の中にはたくさんいらっしゃると思います。ですので、本日の資料といたしましては、まず高専というのはどういうところかということをご説明申し上げた後、今、準備しております滋賀県立高専がどんな学校になるのかという準備状況について、順番にご説明をさせていただきたいと思っております。本日はA4横でカラーの資料をご用意しておりますので、そちらをご覧くださいながら耳を傾けていただければと思います。

3ページ、まず高専についてご説明をさせていただければと思います。高等専門学校というのが正式名称でございまして、高専についてはエンジニアを育てるために5年間で教育をする高等教育機関という意味でございまして、学校教育法の第1条に掲げられてございまして、1条校というふうには呼ばれております。よく似ている部分で高等学校がございまして、高等学校は中等教育機関ということで、その部分で大きく違うということでございまして、中学卒業後の16歳から5年間ですから、二十歳までの5年間、びっちりエンジニアとしての教育を受けるということになってございまして。

高等教育機関でございまして、高校と違って学習指導要領というのがございませぬ。そういう縛りが無い、大学と同じということですから、自由度が高いというのが大きな特徴になってございまして。後ほど説明してまいります、教育についてもそうですし、生活についてもそうですし、高校というよりももう大学とほぼ一緒という認識でいただければと思います。

次のページ、ちょっと急いでつくったんで他の教育機関との比較ということで、高専を知らない方にとっては名称が似ている、例えば専門学校とか高等学校の工業科と何が違うのかということをお聞きしたいと思っております。ちょっと今回は大学が抜けていますが、専門学校も全然違うところですので、そもそも専門学校のスタートは高卒以降のことが中心になります。それは置いておきまして、主に工業高校との違いについてご説明させていただければと思います。

この二つはいずれも中学校卒業後の進路ということになります。大きな違いは、先ほど申しましたとおり、高専は大学と同じ高等教育機関であることとございまして。ですので、高専では学ぶ子どものことを生徒と呼ばずに学生というふうには呼びます。このため、自主性などを重んじた校則などのルールというのは比較的緩やかなというのが一般的な校風でございまして。前期後期制を敷いてございまして、夏休みとか春休みが比較的長い、大学と同じですので。授業は90分が1単位ということになってございまして、そこが高校と全く違うということになります。スタートも学校によって違いますが、大体9時から始まるという生活になります。

先ほど申しましたとおり、高校は文部科学省が定めます学習指導要領に沿った教育がなされるということで、教科書についても検定教科書を使う必要がありますが、高専はそう

というのがないので、何を使ってもいいという形になります。ですので、学校の先生につきましても教員免許が必要ありません。したがって、教育レベルを維持するためには、日頃、教員の先生も勉強しながら、研究しながら日々の進歩についていくということが必要になってまいりますし、教育レベルもその分、向上させていただくという義務があります。抛り所になるところがもう自分しかないということになりますので、教員についてもそういう違いがございます。

それから、後ほど説明しますが、全国にある大部分の高専は国立の高専になります。ほとんど国立の高専とって過言ではありませんが、そこらは高専の上に国立高専機構というのがございまして、文部科学省からお金が入ってそこから全国の国立高専に分配されるという仕組みになっています。お金は縛られている、使途も縛られているということがありますので、あんまり大きな声では言えませんが、文部科学省の方針を伝える必要があるということで、各高専で独自の何か教育をやろうと思うと、なかなか難しいという状況があります。

それから、先ほども申し上げましたとおり、ここは修学期間が3年ということに対して、高専は5年ということで、この5年間で早い時期、16歳の時から専門的な教育を継続して行うということと、それから実験、実習が多いということが高専の学びの特徴になっております。

それから、進路でございます。高専卒業後の進路としましては、当然就職というのがありますが、それ以外に修学というのがございまして、大学の3年生に編入するという道がございます。学校によっては編入する割合の高いところがございます。大学の入学試験をクリアするよりも、高専を通じて編入するほうが比較的大学に行きやすいという裏道的なルートというものがあるということが特徴になってございます。

それから、反対に工業高校から高専への編入というのも制度的には可能なんですけれども、工業高校と高専というのはカリキュラムが大変異なっております。高専につきましては5年間で大学卒業までの理科、数学を詰め込んで徹底的に学ぶということがありますので、なかなか実態としては工業高校から高専への編入は難しいということでございます。制度がないわけではないですけれども、実質的にはなかなか難しいということになります。

反対に高専という特徴的な学習をしますので、夢を持って入ってもなかなかついていけないというお子さんもいらっしゃる場合があります。その場合は、高校に編入することは可能なんですけれども、これもなかなか難しいということがありまして、実態といたしましては通信制の高校に入学されるとか、あるいは大学卒業検定を受けてそこから大学に行かれるという方が多いというふうに聞いてございます。

次のページを開けていただきますと、全国の高専の配置でございます。赤丸で示しているのが国立高専、黄色が公立高専、緑が私立の高専ということで、全体で58校ありますが、このうち国立が51校、公立は3校、私立が4校という状況でございます。都道府県別に見てまいりますと、高専のない都道府県は埼玉、神奈川、山梨、滋賀、佐賀、この5県だけということになりまして、滋賀県は間もなくこの空白県から脱出できるという状況でございます。

全国的な動きでまいりますと、公立の高専設置というのは文部科学省も進めているところでございまして、滋賀県以外に愛知県、福岡県で設立の動きがございます。山梨県でもそういう動きがありましたが、どうもちょっと議会のほうで揉めているようでして、その

後の動きがどうなっているかというのはちょっと不明な状況になってございます。

次のページを見ていただきますと、先ほどちょっと述べました高専生のキャリアパスというところでございます。右側が高専、それから左側が中学から高校、大学、大学院という進路ですけれども、高専の上のところに点線で専攻科というのが書かれています。国立高専の多くには、高専の上に大学という大学院のような2年制でさらに専門的な学びを究めるといふ専攻科がございますが、滋賀県立高専ではこれを設けない予定としております。高専での5年の課程を終えて卒業しますと、先ほども表にありましたけれども、準学士という称号が与えられます。その後、大学に編入し、そこで大学を卒業すると初めて学士という称号が与えられ、そこからさらに大学院に進む道も開けるといふことでございます。

次のページを見ていただきますと、実際の国立高専の進路です。全国で51ある国立高専全部の状況でございますが、左の表、円グラフを見ていただきますと57%、約6割が就職、4割が進学という形になっております。進学の5対3の割合で編入が多いんです。進学のうち、編入が40%、全体の25%程度が編入、15%が専門科という上の部分に進む、高専の上に進むというような状況でございます。

就職先の一例を見ていただきます、超大手企業ばかりでございまして、求人倍率は20倍を超えているということで、選びたい放題というような状況に今なっております。

進学先につきましても、ご覧のとおり大学が並んでおりまして、いろんなところに編入が可能ということになってございます。

次のページをご覧ください。先ほども高専の特徴で実験、実習が中心ということを申し上げましたが、これは大学と比べても割合が高いということがこの表を見て取れます。高専というのは、先ほど申しましたとおり、実験、実習というのが重視されておりまして、低学年からそういうものがカリキュラムに盛り込まれているというところでございます。

さらにその次のページ、私、高専の名前を知ったのはロボコンなんですけれども、NHKで毎年、コンテストをされています。今年度も秋に近畿大会というのが三重の近大高専でございまして、私も見に行ってきたんですけれども、すごいショーになっていまして、大分力を入れられているなと思っています。そういうロボコンの強いところを目指して高専に進まれるという学生さんもいらっしゃる聞いております。去年まで大阪公立高専が3連覇か何かされていたのですけれども、今年は不調で予選で落ちておられましていろいろあるなというふうに思った次第です。

その次のページを見ていただきますと、ロボコン以外にも高専のいろんなコンテストがございまして、プログラミングコンテストとかデザインコンペティションとか英語のプレゼンテーションコンテストとか様々なコンテストがあります。多くのコンテストにつきましては、カリキュラムの一環ということではなくて、課外授業、クラブ活動ということでされている例が多いというふうに聞いております。課外活動、県立高専、どうなるのかというような話、ちょっと気になるところでございますが、これは今後の課題でございまして、それぞれのコンテストはものすごく費用もかかるし、手間もかかるということで、しかも場所が要ることがあって、どこまで手をつけられるだろうといふのは今後考えていきたいというふうに思っております。

課外活動につきましては、それ以外も部活動をどうするのかというのがございますが、それにつきましても今後の課題ということで、実は後ほどお話をさせていただきますけれども、新しい学校を設立するに当たっては文部科学省の認可が必要になってまいります。

我々の高専につきましても、今年の秋に認可申請書を提出する必要がございます。それはカリキュラムとか先生、どんな先生を用意して、どんな授業をするのかとか、そういうものをまず決めていく必要がございます、そちらを優先的に準備している関係で、認可申請に上がらない内容については、その後、検討させていただくということで並行して準備を進めているところでございますが、今、ちょっとまだ検討中というところでございます。

次のページを見ていただきますと、女子高専生が増えているということでございます。1990年では10%を切るものが、24年には23.4%ということで、大体4人に1人は女子学生ということになってございます。

ただ、これは全学科を含めた関係でございまして、個別にどういう学科に女子学生が多いのか見てまいりますと、化学系とかデザイン系、こういうところに人気があって女子学生が多いんですけれども、残念ながら滋賀県立高専は工学科1科ということで人気コースではなくて、あんまり女子が集まりにくいというコースになっているということでございます。

ですが、今後、理系のリケジョもそうですけれども、女子学生をいかに集めていくか、人口が減っている中でそういうことは大変重要になってきますので、それをどうするのかというのも一つの課題になってございます。

次のページから滋賀県立高専の関係にスポットを当てていきたいと思えます。

これも近隣にあります高専を地図に落としてみたものでございますが、琵琶湖を中心としたここは全く高専がないという地帯になってございまして、滋賀県だけではなくて京都とか、あるいは大阪の北のほう、茨木とか高槻とか吹田とかその辺からもなかなか通える高専というのはありませんでした。今通いで行こうと思うと、辛うじて奈良高専に行けるかなぐらいの話。大阪公立大学高専は今、寝屋川にあるんですけれども、2年後に堺の中舌鳥に移転するというようになってございまして、頑張ったら通えないことはないですけれども、2時間半ほどかかるという状況でございます。ですので、滋賀県民の方が今まで通えるような高専というのはなかったということでございます。

全国的にいけますと、中学3年生が卒業して進路の中で高専を選ばれるというのは、大体全体の1%というふうに言われております。

ところが、滋賀県の場合は、この近隣に高専がないということがあって、その半分、0.5%ぐらいというふうに言われております。大体70人から80人ぐらいが全県で高専に進学されるという状況になってございます。その多くは舞鶴とか福井とか岐阜辺りにあります。通えませんが全て寮に入るといふ形になります。

次は、その滋賀県立高専の基本情報でございまして。場所は、皆様ご存じのとおり、この野洲市の市三宅になります。野洲駅から1.3キロ、徒歩で約17分と。多分、高校生だともうちょっと、15分ぐらいで行けるのかな、自転車やったら5分ぐらいで行けるかなと、そういうふうなところでございます。現在の中学1年生、この春、2年生になる方が1期生になるということでございます。定員は1学年120人ということで、5学年ありますので合計5年後には600人になるという見込みでございまして。通える高専ということをしてPRしておりますが、滋賀県内にも遠方の方がおられます。特に高島とか永源寺とか米原、長浜とかそういうところからなかなか通いにくい方もおられるということで、小規模ですけれども、50人規模の寮を設置する予定としております。

次のページでございまして。設置しようと思っておりますのは四つのコースでございまして、

情報系、電気電子系、機械系、建設環境系ということでございます。先ほど申しました女子に人気の化学系とかデザイン系というのはございませんが、この四つのコースで学びをスタートしたいというふうに思っております。

2学年のときにコース分けをしようと思っております、1年生時には共通で学びをお願いしたいと思っております。そこにつきましては、情報技術を基盤としたものをメインに、2年生からコース分けをするという設定でございます。

次のページ、県立高専、四つの学びの特徴ということでございまして、一つ目は、今、言いましたとおり、情報技術を熟知した学びということで、機械にしても建設にしても情報技術、AIというのは欠かせないものになっておりますので、それは共通して学んでいただくというものでございます。

二つ目、1コース30人の少人数教育をしようと思っております。大体国立高専でいきますと1クラス40人というのがメインになっておりますが、それよりも少人数できめ細やかな教育を実施していきたいと思っております。先ほど高専の特徴として実験、実習が多いと申しましたが、それでも国際化とかPBLがどうかということで、カリキュラムはいろいろな新しいカリキュラムの中身に入ってきていて、実験、実習が大分減っているようですが、県立高専は基礎に立ち返って実験、実習を中心に自主性を高める教育をしていきたいと考えているところでございます。

それから三つ目、グループワークとかインターンシップというのは必要になってまいりますので、そういうものを実践的に学んでいくということを考えております。

四つ目といたしまして、技術者の基礎としてコースを超えた学びということで、今、四つのコースと言いましたけれども、2年生になったら情報やったら情報だけやるということだけではなくて、四つのコースの基礎部分は全てのコースで学べるような形を考えていきたいというふうに思っております。

次のページ、初代校長予定者の思いということでご紹介をさせていただきます。北村先生、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、京都大学の副学長をされている方でございまして、工学の専門家でありますし、学校の経営にも長けた方ということで、北村先生に初代校長予定者ということでお願いをしております。現在、県立大学の理事、高専開設準備担当ということで既に着任をいただいているところでございます。

この先生のお考えでは、学生たちが卒業後、50年続くエンジニア人生を豊かで幸福なものにしたいという考えをお持ちで、即戦力ということもあるんですけども、エンジニアの技術というのは日進月歩していくということがありますので、その変化にも耐えていくということをするためには、50年間人生があるとすると、やっぱり基礎が大事ですよと、新しいことをしようと思っても基礎がなかったら新しいことは積み上がりませんよと、ということがございまして、自力、基礎力を重視していくというようなことを信条としておっしゃっております。

それから、知行合一というのをおっしゃっております、陽明学の祖といわれる滋賀県ゆかりの中江藤樹先生のお言葉のようでして、知識と行動は一体で考える必要があるということと、それから知っていることとやっていることが同じでなかったら意味がないのではと、そういうお考え。だから、本当に知っているのだったら自然と行動ができるはずですよということ、頭でっかちではなくて体も動かすことを一緒にやっていきましょうという教育を残していきたいというふうに思っているところでございます。

次のページから事務局員だけではなくて、もちろんそのカリキュラムというのは専門の先生が組んでいく必要がございますので、昨年の4月から各専門のコース、それから一般科目の理系、文系、それぞれに準備の教員を採用し、その先生方中心に今、準備を進めているところでございます。この先生方、後ほどご紹介しますが、出前授業とかもやっていたりまして、各地で好評いただいているところでございます。

それから、19枚目、用地の造成の状況でございます。野洲市市三宅、もともと写真の一番上でございますとおり森でございますが、その部分を伐採し、一部森林を残地森林として残しますが、現在、こういう状況で用地の造成が進んでいるということでございます。この上の部分に、いよいよ今年の5月から建設に着手したいというふうに思っております。この2月2日に入札の公告をしまして、今後、建設の手続に入っていくというものでございます。

その次のページ、施設整備の概要ということで、ちょっと細かくて恐縮でございますが、建物としましては大きくは5棟でございます。校舎棟から体育館までということで上の表に書いているとおりでございます。建物は一番高い建物で校舎棟が3階ということで、比較的低層の建物で臨ませていただくということで、右側にコンセプトを書いていますとおり、地域に溶け込み地域から誇りと愛着を持たれるキャンパスということと、それから国立高専と比べると敷地の面積がそんなに広くなくて、大体一般的な国立高専の半分ぐらいになるんですけども、コンパクトで実質的な、それから現代的な建物を造ってきたいということで設計を仕上げているので、今、その内容につきましてはホームページで公開をさせていただいているところでございます。

それから、この隣接地ですが、野洲市さんと国交省さんが整備されますMIZBEステーションというのが整備されると聞いておりまして、そちらについても一緒に連携しながらいろんなことができればなというふうに思っていますので、引き続きご協力いただければなというふうに思っております。

それから、広報周知活動でございますが、書いていますとおり、いろんなことをやっています。通える高専ということで琵琶湖線沿線のところをまず中心にターゲットを絞ってPRを進めているんですけども、西のほうはあまり行っていないので、そちらも今後、進めていきたいなというふうに思っているところでございます。

それから、その次のページ、いろんな学校にも出前授業などでお邪魔させていただいているところでございます。これまで小学校を中心に行っていたんですけども、いよいよ開校が近くなってきて、中学生にもやっぱり授業をしないとイケませんよねということで、そういうことも始めております。この一番下の7番に書いていますとおり、3月10日には野洲北中学校で授業をさせていただき予定をしておりますし、中学校でいきますと1月20日に安土中学校で授業をさせていただきました。学校単位ではなかなかその中学校のカリキュラムで1時間、なかなか難しいというところもあるので、地域に出向いて公募という形で出前授業をさせていただいているのもやっております。11月には長浜で行いましたし、この2月23日には東近江市で学校単位ではなくて手挙げ方式で応募された方に対して授業をするということをやっています。

授業していますのは、先ほど照会しました準備教員がやっています、いろんなことをやっています。例えば、地震の関係で液状化は何で起こるのかとか、それから電気回路の話とかそういうような興味ある方は多分多いと思いますが、生徒だけではなくて、親御さ

んも興味を持って見ていただいているというような状況でございます。

この出前授業、一括でやる東近江とか長浜でやった分については、併せて相談会というのを実施しております、これは親御さん向けにPRしている部分ですけども、例えば入試はどういう感じか、どのぐらいのレベルの学生が行けるんだろうかという話を、答えられない部分もたくさんありますけれども、そういう個別の相談にも応じさせていただいているというところでございます。

ご用意させていただいている資料は以上でございます、冒頭申し上げましたとおり、いよいよあと2年ちょっとで開校ということになります。ここは地元でございますし、新しい学校なのでどんな感じが分からないとか、受験しようかどうかどうしようかなと迷われている方がたくさんいらっしゃると思います。今日お集まりの皆さんのお子さんとかお孫さんで、ものづくりとかそういうのに興味をお持ちの方がいらっしゃったら、ぜひ1回ホームページ見てみたらということで背中を押していただけるとありがたいと思います。

今日はお時間いただきましてありがとうございます。

【櫻本市長】 ありがとうございます。盛りだくさんの情報を大変分かりやすく、コンパクトにまとめていただきまして、ありがとうございます。

私自身は聞いていますけれども、教育委員さんも始めて聞いていただくということで、疑問、または質問も多くあるかと思しますので、限られた時間ではございますけれども、ぜひここは聞いておきたいということがございましたらお願いしたいと思っております。

それでは、ご質問ある方からお願いいたします。

【野村委員】 委員の野村と申します。お願いします。

まず、試験ですね。全然分からないんですけれども、高等学校の試験と全く別個でやるものなんですか。

【越後滋賀県立大学高等専門学校準備局長】 高校とは全く別組織になりますから全く別になります。

日程につきましても、まだ確定的なことは言えないんですけれども、国立高専は大体年明け1月から2月にかけて試験を実施されております。ですので、県立高専につきましても大体それぐらいの時期に実施するのかなということで、今、準備を進めているところです。

【野村委員】 高等学校の入試と併願というのもできるのかは。

【越後滋賀県立大学高等専門学校準備局長】 それも確実なことを申し上げられませんが、併願できるような形で考えていきたいと思っております。

【野村委員】 入試情報は子ども、生徒にとっては非常に大事なところですので、人生かかっていますので、入試情報をまずきっちり出していただいたほうが生徒にとっては分かりやすいかな、未来が描けるかなと思いますので、そこを早めに提示していただければと思いました。

あとは、県の事業でありますけれども、野洲市の活性化につながりますので、ぜひ野洲市として歓迎ムードで盛り上げていただけたらと思います。看板を立てるとか旗立てるとか、歓迎しているよと、ここに来たら野洲市みんなで生徒を迎え入れるよという雰囲気醸成してあげたらなと思いました。

あとは、企業へのアピールですね。これはもちろんされていると思います、企業の手応えとかもあるものですか。期待度とか。

【越後滋賀県立大学高等専門学校準備局長】 2年前に経済団体と一緒に共創フォーラム

というのを立ち上げておりました、それも数百企業が手を挙げていただいているということでございます。今日、詳しくはご説明申し上げませんでしたけれども、インターンシップというのを考えておりました、一般的なインターンシップは就職活動の一環ということでされることが多いと思うんですけども、県立高専では、教育としてインターンシップをしたいと思っております、そこにも手を挙げていただいている企業が全生徒分超える部分で手を挙げていただいております、企業の協力をいただきながら授業、カリキュラムを進めていきたいなと思っております。

【野村委員】　　そういうのをぜひアピールして、企業へのアピールとそういう反応があるというのをまた生徒にアピールするといいですね。

一般的な偏差値、どれぐらいの学力を求められるものなんですかね。

【越後滋賀県立大学高等専門学校準備局長】　　非常に答えにくいんですけども。

【野村委員】　　他市町村とかはどうなんですかね。

【越後滋賀県立大学高等専門学校準備局長】　　正直な話をしますと、まだ開校していませんから分からないというのが答えになりますが、全国的なのでいきますと、偏差値が大体50から65辺り、トップクラスになりますと70を超えているという学校、コースはございます。

【野村委員】　　女子生徒に人気の学科がないということでしたけれども、今、男女平等という概念がありますので、女子生徒へのアピールもぜひしていただきたいなと思えました。

私は奈良出身なんですけど、奈良女子大学も工学部を設置したというのもありますし、そういう女子だから工学が苦手だという思い込みではなくて、ぜひ女子も工学に興味があれば来てくださいというアピールをしていただく。資料を見ると教員も男性ばかりですね。これもしょうがないんですけど、それを打開するような人材を育てていくというのも使命だと思うんですけども、女性の先生もおられたほうがやっぱり平等という機会からもいいのではないかなと思えました。

あとは、道路の整備ですね。安全性の配慮、どうしても暗いところを17分間歩くということで、安全性の配慮、特に女子への配慮を徹底してやると。女子が来たときには、安全に最大限配慮して学校に来てもらうということもアピールにつながる。街路灯の設置とか防犯カメラの設置とか、できる限りのことをして安全対策をしっかりしていただきたいと思えます。

あとは、ちょっとまた話ずれますけれども、今、新快速の草津止まりというのがあって、昔、コロナ禍前は割と野洲まで全部来ていたんですけども、コロナ禍以降、ちょっと乗客数が減ったのか草津止まりが増えたんですね。これも例えば守山市とかと協力して野洲まで新快速を延長してもらおうと、より生徒さんが集まるんじゃないかなと思えました。

以上でございます。

【櫻本市長】　　答えられるものがあれば。

【越後滋賀県立大学高等専門学校準備局長】　　いろいろありがとうございます。何か期待いっぱいいただいているみたいでうれしく聞かせていただきました。二つございまして、安全性の区分につきましては、学校周辺については街灯をしっかり整備する予定にしておりますし、通学路の部分につきましても、野洲市さんと協力しながらいろいろ考えてまいりたいと思っております。

それから、女子学生の関係につきましては、おっしゃるとおり、増やしていきたいというふうに思っております。どうしても工学系という興味があってもやっぱり1人しかいいひんとか2人しかいいひんとなると、女子のコミュニティーができないということで断念されている方も多いというふうに聞いています。なので、それを何とか増やしたいと思っておりますので、そういう方策を考えております。施設的には寮も含めて女子学生が半分いても行けるというような設計にしております。

それから、先生につきましても、当然やっぱり女性の先生、必要ということで女子枠で募集をかけていたりとかということもさせていただいてまして、できるだけたくさんの女性の教員にも参画いただきたいと思っておりますのでございます。

ありがとうございます。

【櫻本市長】 ありがとうございます。みんなが聞きたいことを全部聞いていただいたぐらいのいい質問をありがとうございます。

ほかにもご質問等ございましたら。

では、瀬古委員、お願いします。

【瀬古委員】 丁寧なご説明ありがとうございます。教育委員の瀬古でございます。

幾つかお聞きしたいと思います。1つは高専を運営していくうえの財政です。制度的に文科省の交付金、あるいは県の補助金、当然授業料をいただくわけですね。どのような財源構成で高専を運営されていくのかが一つです。それに付随して高専の授業料です。例えば国公立の大学、あるいは高校と比較してどうなのかが一つ目の質問です。

二つ目ですが、高専の分布図を見せていただくと51も国立の高専があり、ほかにも公立、私立があるわけですが、新しくできる滋賀県立高専の他のどういった点に校長先生がおっしゃる50年後も生き残っていく戦略をもっておられるのかと。差別化、優位性というキーワードでいうとどういうことになるのかというのが二つ目です。

三つ目は、小学校で出前講座を行って興味を持ってもらい将来的に高専に入学していただくと、そういう取組もやっておられるということですが、一方出口の部分、令和10年に開校して5年後には第一期の卒業生が出るわけですが、そのときに、先ほども話がありましたが、企業との連携といいますか、地元の企業に対してアピールしていかないと。県立大学に入学して勉強しても就職は他府県に行ってしまう学生が多いと。滋賀県に残る率が非常に低いと聞いています。この高専もここでせつかく5年間勉強してみんな県外へ行ってしまおうというのでは、これは県も野洲市としても困ると思うのです。だから、どのように残っていただく手立てを講じていくのかということも一つだと思っております。そのためにはやっぱり野洲市のまちづくりとのマッチングが非常に大事だと思うのです。特に野洲駅のJR北口側のまちづくり。それは高専に通っていただく学生さん達のキャンパスライフを考えるとということでもあります。学校だけがあって、そこで勉強してJRで帰っちゃうと、それだけだと今の若い子にはアピールできないと思っております。学校の周辺、駅との間というのは大事だと思うのです。そこらへんのまちづくりは市と連携をしていく必要があるのではないかと思います。

13ページに1学年120人、5年ですからマックスで600人ですね。学生はそうですけども、教職員の数はどれくらいになるのかということと、先ほど話も出ていましたが、野洲駅と高専との間の通学路です。通学路の防犯の問題や、あるいはインフラの問題なども市や県と連携しながらやっていく、整備していくという必要があると思うのですが、その辺りの

ことも聞かせていただければと思います。

以上でございます。

【越後滋賀県立大学高等専門学校準備局長】 たくさんありがとうございます。何か久しぶりに鋭い質問をいただきまして、緊張しています。

まず最初の財源の話でございますが、オーナーは県ということでございますので、高専としてはいただけるのは県からの補助金になります。

ただ、その中でも交付金とか文部科学省が持っている交付金がございますので、補助金のさらに裏に文科省、国の交付金なんかも制度を活用されるというふうに聞き及んでおりますが、我々高専事務局がいただくのは県からの補助金という形になります。これが100%となります。そのうち入学金とか入試の検定料などをさっ引いた額をもらうという形になるかと思っております。

幾らいただけるかというのはこれからの折衝になりますので、お力添えをよろしく願いますというところでございます。

授業料でございますが、これもこれから議論ということになります。先ほどご説明しましたとおり、高専の大部分は国立高専ということになるので、国立高専の検定料がベースになってまいります。ちなみに、国立高専の入試検定料は1万6,500円、それから授業料は年間23万4,600円、それから入学金は8万4,600円ということになりますので、これをベースにどうするかというのを県当局と折衝になってまいります。我々の立場といたしましては、せつかくの県立高専ですから、県民の分は何とか色をつけていただきたいところですが、それはちょっとどうなるかというのは今後の協議になってまいります。

ですが、先ほど申しましたとおり、ベースはもう全国ほとんど高専の受験者がこの金額で入っていますので、それが基本になるというふうに思っております。

それから、出口のお話をいただきました。企業との連携ということで、今、共創フォーラムにたくさん入っていただいています。お話を聞いていますと、やっぱりうちのところに入社してくれという思いがあって協力していただいているのが多いのは理解しております。高専の求人倍率は20倍というふうに申し上げました。実績を見ていますと、先ほども見させていただきましたとおり、大手の企業に入社しがちということはございます。学生の就職先に縛るということはなかなかできないんですけども、共創フォーラムの企業と一緒に低学年から企業と一緒にカリキュラムを設けようというように今、調整をしていますので、それから県外からも多分受験生がたくさん集まってくると思います。滋賀県の企業、知らない者がたくさん集まってくるので、まずは知ってもらって、その良さを知ってもらって、その企業に就職できるような情報を低学年から与えてまいりたいというように思っていますし、それから卒業後すぐ就職するというのもあるんですけども、教員もそうですけれども、もともとは違コースに行っているけれども、やっぱり滋賀県立高専ができるんやったら滋賀県に帰ってきたいという先生もたくさんおられて、そういう応募もございます。ですので、エンジニアも今、ずっとその1社一筋という方ではなかなかないように聞いておりますので、将来的に滋賀県に帰ってくるというようなエンジニアも育てていきたいというように思っております。

差別化という意味でございます。なかなか難しいことでございますが、先ほど申しましたとおり、国立高専はそれぞれの高専で独自にいろいろ考えておられますが、お金と人が縛られているということがあって、どうしても均一的な学校運営になってしまっていますが、

我々はそれが無いので、基礎力重視ということで校長先生の意向に沿った教育ができるというのが一番の強みというように思っています。

それから、国立高専も多くは元は全寮制というのがたくさんあったように聞いていますが、我々は通える高専ということで言っていますのでそこは大きく違う。とりわけ滋賀県内もそうですし、京都、高槻、茨木という人口がたくさんあるところですけども、通える高専はなかったの、高専という選択肢がなかった子どもたちが多分滋賀県に優秀な子が来てくれるだろうということになると、相当優秀な学生が集まるのではないかというような期待をさせていただいているところでございます。

それから、まちづくりとのマッチングということにつきましては、これは野洲市さんと協力をさせていただきたいと思えます。マックス600人、それから教員は今、55名を予定しています。それだけではなくて事務職員も多分数十名、技術の教職員というのも出ます。非常勤の先生も多分お願いしないといけないということになると、相当数の教職員も集まるということになりますので、学生を中心に考えますと、家から通えるということなので、野洲駅はほとんどの学生が行くと思えますので、その間のところににぎわいができればいいと思えますし、教職員も私をはじめ酒が好きな人がたくさんいますから、野洲にはもうちょっと飲み屋があったらいいのになと思っている方は多いと思えます。55名集まると忘年会とか新年会で一定のキャパが要りますけれども、そんなところなかなかないですよという形もありますので、冗談はさておき、そういったまちづくりについても野洲市さんと協働しながら考えていきたいと思っております。

通学路につきましても、これはちょっと道路整備の話がありますから県も市も両方とお話をさせていただきながら安全な通学路ということを考えていきたいと思っております。

ありがとうございます。

【櫻本市長】 ありがとうございます。通学路とまちづくりにつきましては、当然高専を1歩出ますとやはり市の役割というものは大きいと思っております。南口の整備について議論を始めていますけれども、当然令和10年度から来る高専を意識した北口のほうでのまちづくりというものをしっかりと考えていかなければならないと思っておりますので、地元の住民の方、また場合によっては多くの方がJRを使われますのでJRも巻き込んで、地元企業も巻き込んで魅力あるこの北口、野洲の町並み、そして魅力ある高専につながるように市としてもしっかりと、多くの方が来てくださるということ意識してまちづくりを考えていきたいなというふうに思っております。

はい、ありがとうございます。

まだご発言いただけていない南出委員、お願いします。

【南出委員】 南出でございます。県立高専に関して興味をお持ちの保護者はたくさんいらっしゃいます。

ただ、令和10年度からですが、現在中学2年生がどうしても高専に行きたいということで、舞鶴高専に行かれて、1年後に県立高専に編入が可能なのでしょうか。

また、県立高専のオープンキャンパスは必要になってくると思えますし、設備もそうですが、先ほどおっしゃったとおり、授業料とか詳しい詳細が大切になってくると思えます。今年受験から私学の無償化になることによって公立の倍率が低くなったと聞いております。その中で、高専に目を向けていただけるかどうかは、やはりいろんな詳細が出てこない、向いてはいただけないのではないかなと思えます。オープンキャンパスも含めてい

ろんな情報をいつ頃拝見することができるのか教えていただけますか。

【越後滋賀県立大学高等専門学校準備局長】 まず、転校の手続きにつきましてはまだ全く白紙の状態です。そういう方もいらっしゃるということがあるので、開校後の話になりますのでたちまちということではないですけれども、検討の一つとさせていただければと思います。

それから、詳しい情報ということでございますが、ちょっと先ほど説明を割愛させていただいたんですが、秋に認可申請を出すに当たりましては、入学の定員120人を満たす受験者があるのかどうかということを証明するという、証明書類が要ります。そのためにはアンケート調査を実施する必要がございます、できましたら春に滋賀県内は対象の全員、それから近隣の通学の可能な範囲のところについても一部抽出でアンケート調査を実施したいというふうに思っています。そのアンケート調査をするに当たりましては、おっしゃいましたとおり、授業料が幾らとか試験はいつあるのかとか基本情報がなければ入学するか、受験するかどうか分からないということがありますので、春に調査するまでの間には一定案というものを固めて公表させていただきたいというふうに思っております。

それから、オープンキャンパスですけれども、建設がこの5月からですので、でき上がりが令和9年の11月を目指してします。ですので、実際の建物を使ったオープンキャンパスというのは開校後しかできません。ですが、そう言っていると、なかなか入学の方にアピールできないので、実際の建物を使わずオープンキャンパスはしたいというふうに思っております。それは令和8年度からしたいというふうに今考えておりますが、予算、まだ通っていないのであれなんですけれども、事務方としてはそういうふうに思っております。それには実物を見ていただくわけにはいきませんが、模型もありますし、それから動画で入ったらこんなですよというやつもつくっていただきたく思っています、それもかかりますのでなかなか確定的なことは言えませんが、工夫しながら実施していきたいというふうに思っています。いずれにしても、春には一定の判断ができるような情報は公開したいと思っています。

今、直前なので言いたくも言えないことがたくさんあるんですが、もうしばらくお待ちいただいたらしゃべらせていただけると、そういう状況でございます。

【櫻本市長】 はい、ありがとうございます。

教育長、最後、どうですか。

【北脇教育長】 局長、ありがとうございます。本当に詳しく、そしてまた、本当に分かりやすく説明をいただいたなと思います。

先ほど少し話をされましたけれども、共創フォーラムにも寄せていただいて、北村先生のほうから本当に壮大なというか、そのお話を聞かせていただきました。北村先生のすごくアクティブに、すごく緻密であって、そして夢をすごく掻き立てるといえるのか、そういうふうなお話でもありましたので、ぜひ私も行ってみたいなというふうな思いを持ったんですが、この県立高専は通える高専ということでもありますので、それを体現できるのか、その一番がやっぱり野洲の子たちだというふうに思います。歩いて行ける、自転車で行けるところに高専があるというのは、本当に魅力的でありますので、ぜひ市内の中から子どもたちが高専のほうに行ってくれるということを願っています。

ありがとうございます。

【櫻本市長】 はい、ありがとうございます。たくさんのご質問をいただきまして、あ

りがとうございます。

市内小中学校に対しまして出前授業を行っていただくなど、理科教育への関心に結びつけるような学習にご協力を既にいただいているところでございます。今後はさらに可能でしたらまた今言われております部活動の地域展開ということもございますので、こういったものもその検討の一つとして加えていただければ幸いかなというふうに思っておりますので、今後ともどうぞよろしく申し上げます。本日はありがとうございました。

【川崎教育部次長】 そうしましたら、5分ほど休憩を取らせていただきます。この間に次の議題への準備をさせていただきます。よろしくお願いたします。

(休憩)

【櫻本市長】 時間も押していますが、二つ目の議題ということで、ALTの活用について事務局より説明をお願いします。

【中西学務課専門員】 失礼します。ALTについてどのような形で活用しているのかということをご説明させていただきたいと思えます。

モニターに映したかったんですが、今、映らない状態ですので、お手元の資料を基にお話をさせていただきたいと思えます。よろしく申し上げます。

派遣形態ということで、2025年の6月よりALT1名が配置されております。基本の形としては、市内3中学校を1週間ごとに巡回して勤務していくという形にしております。

また、中学校だけではなくて、小学校へも派遣するというので、小学校は9月と2月上旬、来週からと3月上旬までを集中配置期間として巡回勤務をしていただいております。

小学校については英語専科の教員がおりますので、その時間割に合わせて4年生から6年生の外国語活動及び外国語科の授業に入らせていただいております。

お手元の資料に中学校の1週間ごとの例と小学校の学校ごとの時間割に合わせた配置を書かせていただいております。このような形で学校を巡回して現在1人で9校の授業を担当いただいているということになっております。

続きまして、スライドの3ページです。今年度どのぐらいの授業が実施できたのかということを示させていただいております。中学校は先ほども出させてもらってように、1週間ごとに学校を巡回しております。6月、7月、10月の約8か月間勤務いただいております。おおよそ1か月で各校1週が確実に回れるという形になっております。なので、各校の勤務週数でいうと、1校当たり約8週ということになります。

どのぐらい授業に入れたのかということになりますと、クラス当たり1週間で1回授業に入れるというのがおおよそペースになっておりますので、学校規模が違いますので、学級数が多いところだと8回、少ないところだと10回ぐらいの授業に入らせていただいたという形になっております。

続いて、小学校です。小学校については、英語の専科教員がおりますので、それと一緒に巡回しております。9月と2月中旬から3月上旬ということで、こちら見込みになりますけれども、全ての学校が4年生で延べ2回、そして5、6年生は週に2回授業がありますので、延べ4回授業に入らせていただいているというふうな形になっております。

実際に派遣させていただいて、英語の授業支援の中身なんですけれども、スライドの4枚目になります。コミュニケーションのモデルになるというのが一番大きなメリットなのかなと思っております。今まで英語の教員1名ないしは外国語活動等支援員さんがいたんですけれども、ALTが就くことによってやり取りのモデルトークができるということや、発

音の指導ができるというところで、非常に効果的に活用させていただいております。

あと、中学校ですと、筆記、記述というのが出てきますので、中学生が書く英作文で、英語の先生が迷われる微妙なニュアンスの添削などもALTに行っていただいております。

下のほうには、実際、小学校の教員や中学校の教員の声を載せさせていただいております。小学校は特に表現のコミュニケーションが中心になりますので、やはりそこで相手がいるということが子どもがこんなふうにしやべればいいのかとか、こんなふうに発音するんだということのイメージを非常に湧かせやすい効果のある形で活用させていただいております。

それでは、5枚目のページになります。そして、ALTについては英語での授業だけではなくて、授業時間外のコミュニケーションも非常に積極的に取っていただいております。国際理解といったところにおいても活躍していただいている状況です。休み時間や昼休み、下校時に積極的に子供たちのほうに出向いてコミュニケーションを取っていただいていますし、外国の文化の紹介というふうなことで、小学校4年生以下の3年生、1年生、2年生に授業に行くということも実施しています。

あと、中学校では部活動に顔を出してコミュニケーションを取ったりということで、授業以外のところでも子どもたちと積極的にコミュニケーションを取って国際交流というところの理解に努めております。

写真とコメントを少し載せさせていただきました。上の写真、今回来ていただいているALTのパトリック先生は楽器が非常に堪能ですので、小学校で子どもたちが休み時間にピアノを弾いているんですけども、そこに現れたパトリック先生を見つけて子どもたちがパトリック先生、ピアノを弾いてということで弾いたときに、人だかりができてミニ演奏会のような形になったというようなことも聞いております。あと、部活動のほうに参加して、吹奏楽部の子たちにアドバイスをしたりだとか、運動のほうにも参加したりというようなこともあります。非常に多彩な特技をお持ちで、その力をふんだんに使いながら子どもたちと一緒に関わっていただいているというところでございます。

では、6ページ、野洲市の現状ということで、今年度ALTが入る前の段階で野洲市の中学生たちの英語の状況はどうだったのかということをお過去のデータ等を基に少しご説明させていただきます。

令和5年度の全国学力・学習状況調査の中では、英語のことについての質問がございました。英語の質問は3年に1回ということなので、令和5年度にあってからはないのですけれども、そのときの状況です。質問三つありまして、英語の勉強は大切だと思いますかということについては、8割を超える子がそうだと思うという肯定的な回答をしております。一方で、英語の勉強は好きかや英語の授業内容はよく分かるかということについては、半数よりも少ないというような回答の状況になっております。

続いて、7ページです。こちらは今年度、ALTの派遣をお願いしておりますインタラクさんの学び状況診断アンケートということで実施させていただきました。今年度の子どもたちはどのように感じているのかということ、今よりも英語を勉強する必要があるということについては90%、将来使うことができそうだ、外国の人と英語で会話できそうなのは、令和5年度の調査と同様に半数、もしくは半数以下ということになっており、「使う」という部分においては課題があるのが本市の現状なのかなというふうに思っております。

しかしながら、ALTの先生に来ていただいたことで、8ページからですけれども、生徒

の声はこのような形で上がっております。パトリック先生が来てくれるとすごく楽しみだと、英語でしゃべりに行ってコミュニケーションを取りたいと思う。これまで学習したことを使っていきたいと思うなど、非常に学習に対しての意欲、学習理解が進むといったことの声も上がっております。

続いて、9ページです。これは野洲市の教育委員会で独自にアンケートを取らせていただきました小学校5年生から中学校3年生まで9月に取らせていただいたアンケートです。全ての学校でALTの授業をした後のアンケートになっております。

ALTと一緒に学習することはすごく楽しいであるとか理解しやすいということに対して、非常に肯定的な回答が多くなっております。英語で話してみたいという気持ちも高いという結果が出ております。

また、4番や5番のところでは、英語や外国語の文化などに非常に興味が出て、これまでよりも強い気持ちがあるということやもっとたくさん学習したいということも肯定的に回答いただいております。

続いて、11ページです。このような状況の中で、12月から1月にかけて再びインタラックさんにアンケートに協力いただきまして、野洲市の今年度、いろんな取組をした中での強み、そして課題を改めて確認させていただきました。

野洲市の中学生の強みは、英語学習に対する意欲の高さ、学んでみたいと思うことや英語が必要だと思うということの認識が全国平均とほぼ同等程度であるというふうなことが言われています。英語を今よりも上手に学ぶ方法を身につけたい、今よりも英語を勉強する必要があるということは非常に高い数値を表しておりますので、こういったところは野洲市の子どもたちの強みなのかなと。

また、中学校1年生においては、英語の勉強が楽しいというのが74.5%と全国平均を大きく上回っております。例年、中学校に入ると楽しさというのが少しくつ2年生、3年生は低下していているんですけども、1年生で全国よりも高く出ているところについては、今年度からALTが入ってきたということ、ALTの交流を通じた学習への動機付けの結果が表われているのかなというふうに分析しております。

しかしながら、やはり課題もありまして、12ページでございます。やらなければならない、やりたいという意識の高さに反して、実際の活用に対する自信には課題が見られます。将来、ふだんの生活や仕事において英語を使うことができそうだと外国の人と英語で会話ができそうだというのは数値が低くなっております。7月頃に取ったアンケートよりも数値が下がっているという現状もございます。

これについては、今まで外国の人と話をする機会というのはほとんどなかったですので、実際にALTの方に来ていただいていざしゃべろうと思ったときに、なかなか思うようにいかないんだなという現実を見た部分というのがすごくあるのかなと思っております。

しかしながら、とにかくパトリック先生としゃべりたい、ALTの人が来てくれると英語が楽しいという声がありますので、今年度においてはそういった部分で子どもたちが英語に対する興味をちょっと持っているということは、非常に成果として、ALTの効果として上げてよいのかなと考えております。

それでは、13ページ、今後についてということで、次年度です。今年度、1名ALTが入りまして、次年度は2名ということで予算の内示をいただいております。教育委員会としては、大きな円の右側、ALTの力を最大限に発揮できる配置計画というのをしていかなければ

ればならないかなと思っております。今年度1名入っていただきまして、中学校、そして小学校に回っていただきました。実際に来ていただいて、1名ではあるものの配置することで、思っていたことと想定したことが違うという困難さも見られました。各校の行事に合わせてパトリック先生に回っていただくんですけども、やはりその細かな調整であったりとか、学校のいろんな時間割変更等をリアルタイムでパトリック先生に伝えていくという配置の部分であるとか、先生方も小学校についてはずっとALTはなかったですので、ALTとどのように授業を組み立てていくんだろうかというところにまだまだ不安を覚えておられるところもあります。

そういったところは、ALTを派遣いただいている事業者様と協働で教員向けの研修等も教育委員会としては計画していかなければ、ただ人を就ければいいということではないのかなというふうに考えております。

そして、先生方においては、ALTとどのような授業のツールがよいのかということや仲間同士でしゃべれる場というのが必要かなと思います。中学校は各校に英語の先生が数名おられますので、それぞれ交流ができるんですけども、小学校は4名で6校を回っていただいているということで、学校の中で英語を専門にされている方は1名ということになりますので、その連携等を図っていくということも必要ですし、あと授業外でのALTの活用ということも併せて進めていかなければならないのかなと思っております。

14ページの右側です。配置計画のところ、来年度は2名ということをお伝えいたしましたが、今年度は中学校では3週に1回、そして小学校は時々、1週間程度回ってきてくださるという形だったんですけども、その頻度を3週に1回、ないしは2週に1回という形で上げていくということが目標になっていくかなと思います。そのためには、学校全体でALTをどのように活用していくのかということもしっかりと位置づけていかないといけないかなと思っております。

最後に15ページです。今後の展望ということで、より一層の英語能力、英語教育の充実ということをお考えたときに、令和9年度以降、もう少しALTの定員を増やせる、増員をできるといいかなというふうに思っております。

ただし、数を増やせば効果が出るというものではありませんので、今ほども申しましたように、来年度は、まずは2名、複数ということの実績をしっかりと積み重ねて、効果的な活用ができるということの取組を確実に進めていきたいなど。それが見えてきた中で、理想とする人数、2名よりも多くということになっていくのかなと思いますので、まずは2名でしっかりと効果を高めていくことを目指したいなというふうに思っております。

私から説明は以上とさせていただきます。

【櫻本市長】 はい、ありがとうございます。

それでは、このALTについてご質問やご意見がございましたらよろしくお願いたします。

【野村委員】 生徒のアンケートで、英語の授業が楽しいという数が増えたのは非常にうれしく思いました。やっぱり積極的に学ぶという姿勢と好きになってくれるというのは非常に大事なことです。パトリック先生が多分いい先生なんだろうなという気がしました。

あと、私自身は奈良で育ちまして、普通の奈良高校という県立の高校で育って、全くそういう特殊な教育を受けていないので英語は全くしゃべれません。英語しゃべれたらいい

など思いながらも、忙しさにかまけて全く勉強ができていないのですが、その中で英語をどうやったらしゃべれるようになるかとか考えていたわけですが、一つは京都の洛西高校、そこはミッション系、カトリック系の学校なんですけれども、常に外国人がいます。そういうカトリック系の高校なんです、常に何か英語があふれていると言っていて、その出身の先生は常にしゃべっている状態だから、海外に行っても普通にしゃべれると、そういう状況にあったみたいです。そんな学校もあるんだなと思いましたので、やっぱり英語をしゃべれるALTの先生、数が多いほうがいいのは間違いないし、ふだんの日常会話ができるような状況まで持っていければいいだろうなど。先ほどの話では、むやみに数を増やせばいいというものではないという話でしたけれども、でも絶対多いほうがいいし、常にしゃべれると絶対いいなど、そういうふうに思いました。

あとは、問題点としては、そのパトリック先生もそうなんですけれども、雇用形態とか、あとはその先生の指導能力の担保とか、この先生はどこ国の出身なのかとか、多国籍で英語がしゃべれる先生でもいいのかとか、そういう指導能力の担保などはどうされているのかなと思いました。

あと、予算の出どころとか、これは文部科学省からの要請でやっているのか、野洲市として積極的にこれからやろうとしている事業なのかというのを思いました。

そういう観点でいうと、岡山県の総社市に、今、インターネットで調べていたんですけれども、英語特区というのがあって、そこで積極的に先生を入れて、町として機運を高めていこうみたいな取組もあるみたいですので、ぜひ文部科学省からの受け売りではなくて野洲市として積極的にやっていくんだぐらいの気持ちで取り組んでいただきたいなと思いました。

以上です。

【櫻本市長】 では、回答をお願いします。

【中西学務課専門員】 ありがとうございます。ALTの先生の指導の能力ということなんですけれども、英語指導助手、ALTの派遣の契約を結んでおりますので、その派遣会社さんのほうでどのような人物であるとか、学習指導要領に則ったネイティブと言われる発音に基づくような指導ができるような研修を組んでいただいております。プロポーザルをしておりますので、その中で小学生や中学生に指導ができるような人材育成の仕組みがしっかりあるのかといったところも評価の材料として確認させていただいておりますので、おっしゃるように指導能力が子どもたちの意欲、学習の定着にも大きく関わると思われますので、そういったところは事業者さんと連携しながら入札のときに確認をしているようなところなんです。

どこの事業がということで、教育委員会のほうで予算、学務課のほうで予算をいただいて実施させていただいております。

【野村委員】 派遣会社と契約を結んで、そちらのほうから派遣されていると。派遣会社としてそこをアピールするぐらいの気持ちでお願いします。

【櫻本市長】 はい、ありがとうございます。

ほかにはいかがでしょうか。

では、瀬古委員、お願いします。

【瀬古委員】 このALTについては、私が教育委員に就任させていただいたときから言い続けてきたことがやっと今の市長さんになって実現したわけです。

私事になりますが、私には女の子が二人います。当時、上の子が小学校2年で下の子が幼稚園だったと思うのですが、突然海外赴任になりアフリカに赴任しました。そこには日本人学校がなかったのでインターナショナルスクールに通わせました。プリティッシュスクールですが、ABCも全く読み書きできない状況です。日本語を話せる先生もインターナショナルスクールなので当然おられませんでした。そこへ1日行ったら泣いて帰ってくるのかなと思いましたが、3年間通ってくれました。3年後には子ども同士ではネイティブと自然な会話ができるようになりました。子どもの頭の中は真っ白ですから、全てそのまま素直に頭の中に入るわけです。大人だとバリアがあるから中々入らないですが。

言いたいことは、小学生のときにネイティブスピーカーと話をすることが非常に大事だと思うのです。日本人同士で英語を話してもリアリティがないわけです。それは幾ら英語が上手く話せる日本人の英語の先生であっても。やはりそこはネイティブと話すということに意味があるのです。それも別にアメリカ人でなくてもいいわけです。今世界中で英語を話しているわけですから、インド人の英語もあれば、フランス人の英語、韓国人の英語もある。みんな英語のおかげで会話ができるわけですから、そういう機会を子ども達に持たせることが大事だと思うのです。

資料に書いていただいたように、私が想像していたとおり、子ども達はやはりネイティブと話をする実体験によって英語を話す、英語を勉強する意味が分かるわけです。英語を勉強して何に使うのだと。我々の時代だと、英語を勉強して使いようもないのということと英語が嫌いになるわけです。要は受験英語です。実用的な英語を全く体験できなかった世代です。

私の子ども達は2名とも中主小学校卒業なのですが、帰国したときに学校にはALTの先生がおられました。そのときは、それは中主町の直接雇用かJETプログラムによる採用ではなかったかと思えます。しかし、事務局は直接雇用のやり方を良い先生に当たれば良いが、そうでない先生だと世話する手間ばかりかかってということもあって、ALTを廃止したと聞いています。野洲市の学校だけが長い間ALTがいなかったのです。それがやっと1人実現したわけです。このカリキュラムを見せていただくと、やっぱり1人で9つの学校を巡回するというのは無理があると思うのです。多ければ多いほど私は良いと思います。各学年に1人でも良いと思うのですが、それは財源の制約があるので難しいと思います。市長のご理解もあって来年度に向けて1人増えるという方向だと説明がありましたが、できれば最低でも3人。3人だと、三つの学校にALTの先生であれば、単に授業のコマ時間だけではなくて、様々な校外活動や、あるいはクラブ活動的なものなどにも参画して、もっとリアリティのある会話が子ども達にとってできるようになると思うのです。

今日の説明で子ども達も喜んでいいということは間違いないし、保護者の皆さんもそうだと思うのです。先生だってそうだと思います。ここからもう一歩前に進めていただいて、ぜひ国際的な視野を持つ子ども達を育てる野洲市になっていただきたいと思いますので、どうぞよろしくをお願いします。

【櫻本市長】 はい、ありがとうございます。教育部にとっても大変心強いお言葉をいただいたと思っております。今年は来年度に向けて2名ということでございますけれども、またさらにその次、毎年毎年の成果とかも確認しながら、こういった体制で臨むのがいいのかということを考えていきたいと思っております。貴重なご意見、ありがとうございました。

南出委員どうぞ。

【南出委員】 先ほども申し上げたとおり、我が子が今、中学2年生にありまして、パトリック先生にもお世話になっております。この前も対面でお話する機会があったらしいのですが、うちの娘がちょっと体調不良でお休みをしていたので、後日、日本人の英語の先生に対応していただけたらしく、やはり残念がっていました。

瀬古委員もおっしゃったとおり、もう何名かいらっしやると、お話しできる機会が増えるのではないかなと思っております。

ただ、増員していただくだけではなくて、今後の英語の授業がよりよくなることを願っております。

質問なんです、現在パトリック先生にはフリーの日というのがおありなのでしょうか。あと、通常英語を使う機会はないというお思いの子も多いと思うのですが、自分が望んでいなくても必然的に英語を使わなければいけない環境は、これからより一層増えてくるかと思っています。いろんなものが進歩していった翻訳機等があるとされても、やっぱりとっさに英語で話されたとき、片言でもいいから英語で話すということを自然に身につける子どもたちに、挑戦できる子どもたちに育っていただきたいなと願っております。

以上です。

【中西学務課専門員】 ありがとうございます。パトリック先生はフリーの日があるのかというご質問ですけれども、2ページの小学校の例の資料も見ていただくと分かりやすいかなと思うんですけれども、9月1日から始業式で学校が始まりまして、最初の週、中主小学校に行っているんですけれども、ここは午前中だけの授業になりますので、それでもほぼ満タン入っていただいていますし、9日以降、北野小学校や野洲小学校に行っているんですけれども、英語専科の先生の授業に合わせていたのでほぼ満タンで、フリーの日というのはないというのが現状でございます。

先ほどの質問にもありました指導力の向上ということで、実は今日、野洲北中学校に行っているんですけれども、午後からはインタラックさんの必須の研修があるので、そちらのほうに行かせてもらいますということをおっしゃるので、日々授業や自己研さんということで過ごされていて、その隙間を縫って子どもたちとやり取りしてもらっているというような状況でございます。

あともう1点、英語に親しむ、挑戦の機会ということで、これも今年度初めて入ったところで、基本英語の授業というところが中心になっているんですけれども、次年度以降、例えば英検を受けたい子たちの放課後の面接の練習であるとか、学習補充であるとか、あとスピーチコンテストであるとか、そういったことにチャレンジする子もおりますし、そういったコンテストでなくても日常的にしゃべる場というのは、しっかりと設けていかないといけないのかなということ今年度1名入った中で、やはり改めて確認したところでもありますので、課題であるとともに今後へ期待の持てる部分でもあるのかなと思いますので、もっとたくさんというお声もあるんですけれども、まずは次年度2名でしっかりと成果を確認しながら、次の期待というものも見出していったらなというふうに思っております。

【櫻本市長】 よろしいですか。では、教育長、何かあれば。

【北脇教育長】 ありがとうございます。本当に今、教育委員さんの方々から出していただいたことは、ある意味、その積年の思いというようなことを市長に聞いていただいたところがあるのかなというふうに思っています。それほどまでにALTという方を配置いただけたということを実際にみんなが楽しみにしていたといいますか、そういう思いはあ

って、何よりも子どもたちにとって、野洲の子どもたちからしますと、本当になかなか今まで慣れ親しんでないという状況ではあったんですけども、これが1名でも配置をされることにおいて、その人の生活であるとか、あるいは文化であるとかというふうなことを含めた国際理解にもつながっていきますし、そして何よりもやっぱり生のという言い方がいか分かりませんが、本物の方が来ていただいて、そして子どもたちの前に立っていただいてというふうなことを考えていくと、全体的にはやっぱり野洲の子どもたち、僕はいい子ってすごくたくさんいると思っています。

ただ、そういったものをこのALTが配置されたということにおいて引き上げる、あるいは底上げするというふうなことにぜひ活用いただきたいなと思うのと、それから読んだり聞いたり、そして学ぶという意欲につながって、さらに自分の力を発揮したいなと思うようなことにつながっていくといいかなと思っています。

次年度の教育方針の中にも、やってみひんかったら分からへん、でもやっぱりやってみようというところを、少しの勇気と、それから仲間とともにALTに話をしようとかいうふうなことにつながっていけばうれしいなというふうにして思っています。このように配置いただいたこと、大変感謝申し上げますけれども、まだまだこれからこれを実績として積み上げていくことが必要だというふうに思いますので、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

以上でございます。

【櫻本市長】 はい、ありがとうございます。

時間も過ぎておりますので、まだまだご意見、またご質問もあろうかと思っておりますけれども、これにつきましてはここで終了させていただきたいなというふうに思っております。

このALTにつきましては、引き続き子どもたちの英語教育への興味、関心、これを高め、また異文化理解を深められるようにということでも取り組んでいきたいというふうに考えておりますので、引き続きのご指導をよろしくお願いをいたします。

以上、2点、高専準備室の準備の状況、それからALTにつきましては、大変貴重なご質問、そしてご提言をいただいたと思っておりますので、ぜひとも今後の教育行政に生かしていきたいというふうに考えております。本日は長時間にわたりましてありがとうございます。

それでは、事務局に返させていただきます。

【川崎教育部次長】 出席者の皆様、長時間にわたりましてご意見をいただきありがとうございます。また、予定時間を超過しましたことをお詫び申し上げます。

本日の会議の内容は、議事録作成後、市のホームページにおいて公表させていただきますので、ご了承ください。

これをもちまして、第2回野洲市総合教育会議を閉会とさせていただきます。ありがとうございました。

— 了 —